

TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌



特集 学び続ける英語教師であるために

特集

巻頭エッセイ 豆本を楽しむ	田中 葉	01
自主研修のすすめ：「学びに立ち向かう力」を求めて	田邊祐司	02
成長し続ける教師であるために	中島真紀子	06
英語教師としての「指導力」とは？ —これまでの実践から学んだことを通して—	山城 仁	08
英語教師として私を支えるもの —過去・現在・未来—	山元 洋	10

連載

英語教師のための基礎講座 「流れる」ような授業を	重松 靖	12
評価クリニック テスト作りの研修	根岸雅史	14
授業レポート Projectを活用した授業実践例(1) —生徒がアクティブに・統合的に英語を使用する授業をめざして	谷口友隆	16
小学校英語 Just Now 今、私立小学校の外国語教育に何が起きているのか(2) —「英語ができるようになりたい」という子どもたちの思いにどう応えるか	入江 潤	19
単語の文化的意味 91 shame	森住 衛	21
Essay Offering Challenges: A Motivating Teaching Strategy	Concha Moreno García	22
英語指導のスパイス CLILに基づく教材づくりと活動	富永裕子	23
AROUND THE WORLD 英語から見たタイ語 [4]	峰岸真琴	表紙裏
表紙写真について トナカイ牧夫の子どもたち	大石侑香	表紙裏

Vol.34

FALL 2016
SANSEIDO

タイ語の文法

タイ語の基本語順は SVO で英語に似ている。ただし、目的語の位置には、動作の対象だけでなく、「チェンマイ (に) 行く」「バス (で) 行く」のように、目的地や手段を表す名詞も、前置詞「に」「で」を使わずに現れる。

pay chian-may (行く+チェンマイ)「チェンマイに行く」
pay rot-mee (行く+バス)「バスで行く」

また、この例の「主語」のように、会話では話し手と聞き手の間で了解されていることをいちいち表現せず、「省略」する。これは日本語にも共通する原則である。

タイ語では、SVOO の構文に現れる動詞は、「与える」「教える」など、ごく少数の動詞に限られており、「行く」は目的語を 2 つとることはできない。

それでは上記の例文をまとめて、「バスでチェンマイに行く」(to go to Chiang Mai by bus) は、どう言えばよいだろうか。英語の by のように、述語動詞と名詞の関係を表す前置詞 dooy「～によって」を使うこともあるが、自然なタイ語らしい表現では次のようになる。

nan rot-mee pay chian-may
(座る+バス+行く+チェンマイ)
＝「バスに座り(＝バスで)チェンマイに行く」

この例では、「バスに座る」(＝バスに乗る)動作が、続く「チェンマイに行く」動作のための手段を表している。この「バスに座って」＝「バスで」のように言い換える発想は、日本人には理解しやすいだろう。このように動詞

句(目的語名詞を伴うこともある)がいくつも続く構造をタイ語文法では「動詞連続 (V+V+V+...)」と呼ぶ。これは日本語の複合動詞と比べることもできるが、日本語では最後の動詞だけが終止形、他は連用形となる。また英語の文では複数の動詞が一つの文(節)に存在する場合、その一つだけが定形となり、他は不定詞、動名詞、分詞形のいずれかを取らねばならない。一方タイ語では語形変化のない動詞が、理論的には無制限に続くのである。

次の例も動詞連続の一種である。rew「速い」は、タイ語では状態動詞と分類される。状態動詞は動作動詞の直後に現れる場合、動作の有り様を表す。英語であれば、副詞「速く」が述語動詞を修飾するが、タイ語では「走る」と「速い」という結果となる、という表現になる。

win rew (走る+速い)「速く走る」

この文の否定文は、「走る」と「速い」のどちらの動詞を否定するかによって、意味が異なってくる。

may win rew (否定辞+走る+速い)「わざと遅く走る」
win may rew (走る+否定辞+速い)「走っても速くない」
つまり、やる気がないなら前者、やってもダメなら後者を使う。このように、タイ語は英語に似ていると油断すると、落とし穴が待っている。英語だけでなく、タイ語に挑戦してみたいかだろうか。

表紙写真 について

トナカイ牧夫の子どもたち

大石侑香 Oishi Yuka (日本学術振興会特別研究員 PD)

ハンティは約 40 のシベリア北方少数民族のひとつであり、北西シベリアに約 3 万人が住む。ソ連時代の集団化以降、定住村に住む者も増えたが、現在もタイガの森の中で狩猟・採集・漁撈・トナカイ牧畜を営んでいる者も多い。今年の 3 月に私はシベリアのヤマル-ネnetz自治管区のトナカイ牧畜キャンプにて文化人類学調査を行った。

トナカイ牧夫はシベリアの広大な大地をトナカイにそを曳かせ、年間を通して移動して暮らす。今回お世話になった家族は写真(右下)のよ

うな毛皮の天幕に住み、1400 頭のトナカイとともに、冬には西シベリア低地の村の近くに宿営し、夏にはウラル山脈を越えたところまで行き、また同じルートで村の方に帰る。その移動距離は年間 400km にもなる。冬は-40 度以下になり、もちろん電気・ガス・水道・インターネットはない。薪で暖をとり、灯油ランプで明かりをとる。食糧は飼育しているトナカイの肉とパン。大自然の中をまさに「旅を住処」として

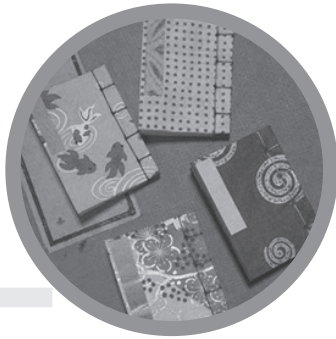
いる逞しい人々だ。

そうした生活を送る牧夫の子ども

たちは親元を離れ、普段は定住村にある寄宿生学校で学んでいる。しかし、子どもたちは夏休みとなる 4 月下旬から 9 月下旬まで親の遊牧について行く。写真(左上)は、徐々に家族みんなで食卓を囲んだ楽しいひとときのものである。

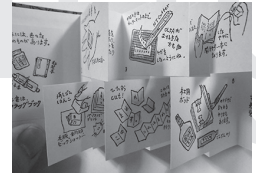
これから夏休みの終わりまで、子ども達は親の仕事をよく手伝い、遊牧生活を学んで過ごす。ウラル山脈の西側の宿営地に子どもたちを学校に送るヘリコプターが現れるまで。





豆本を楽しむ

田中 葵 Tanaka Shiori



幼い頃から本が好きでしたが、小学生だった昭和40年代、住んでいた横浜の公団住宅の近くに書店も図書館ありませんでした。私は広告の紙を小さく切って裏面にマンガや小説を手描きし、豆雑誌のようなものを作りました。不定期に発行を重ね、それはいつしか、クラスメートの間で回覧されるようになりました。

あれから40年余。パソコンが普及して、個人でも本格的な印刷物や本を作れる時代が到来しました。本作りには、執筆、編集、校閲、デザイン、製本など多くのスキルが必要ですが、本当に大切なのは内容と個性、そしてその表現方法です。私自身、長らく手製本の教室に通いましたが、自分だけの本を手作りする人は存外多いのです。なかでも小さな本（豆本）を作る人たちは、今、30～50代の女性を中心に、パワフルな活動をしています。

私は、オリジナルの豆本作品を展示販売するイベント「豆本フェスタ」を何度か主催したことで、こうした人たちとの交流が増え、2011年には日本豆本協会を設立しました。

この年、初めての交流茶話会「豆本のつどい」を横浜で開き、数十名の豆本好きが集まりました。自慢のお宝豆本コレクションを持参する愛好家、2cm角の小さなハードカバー豆本を作る女性作家、自作の編みぐるみのキャラクターを主人公にして撮影し、抱腹絶倒の写真豆絵本を刊行する作家、豆本を製本するのに役立つ便利な道具を、100円ショップの商品を工夫して編み出す達人…。

さまざまな豆本好きが出席しましたが、なかでもこの日、最も注目を集めたのは、手のひらに乗るサイズのピアノを手づくりしてきた方です。それは木をカットし組み立ててヤスリで磨き、黒い合成漆を

塗って、ちゃんと蓋が開け閉めできるアップライト・ピアノでした。実は、鍵盤を引き出すと、これが豆本になっているのです。

音楽好きの友人の誕生日プレゼントとして作ったもので、販売品ではない、と本人は話すのですが、実物を見た人たちはみな買いたがり、「作って欲しい」とリクエストが殺到しました。

彼女は平日、会社員として働いていますが、以来、休日は小さなピアノを作る豆本作家になりました。その後、豆本イベントに出展参加すると、お客さんのリクエストに応じて、革張りの座面が回転する豆椅子が追加され、白いピアノができ、そして豪華なグランドピアノまで手作りすることに…。

機械生産でない「もの作り」は、造形も素材も、そして進化の度合いも自由自在です。少数の手づくりだからこそできる、豊かなアイデアと創意工夫には、驚かされるばかり。大量生産の出版物やパソコンの画面で見るバーチャルな本とは違う楽しさがたくさんあって新鮮です。

こうした作品は、作家のサイトや豆本販売イベントで販売されています。今年4月には豆本書店というリアル書店も開店（三省堂書店神保町本店・神保町いちのいち内）、手づくり少数とは言いながら、流通販売の展開も活発です。

本は読む楽しみだけでなく作る楽しみもあり、そして更に売ること、読者と交流する新しい世界も開けます。目下の私の喜びは、こうした楽しいことを、たくさんの人たちに知ってもらうことです。

たなか しおり

日本豆本協会会長、日本出版学会会員、東京製本倶楽部会員。横浜市出身。出版社勤務の後、フリーに。豆本イベントを主催し、自宅や全国各地で豆本・製本ワークショップ講師を務める。著書に「古本屋の女房」(平凡社)、『書肆ユリイカの本』(青土社)、『田中葵の豆本教室』(マイナビ、近刊予定)がある。

特集 学び続ける英語教師であるために

自主研修のすすめ： 「学びに立ち向かう力」を求めて

田邊 祐司

(専修大学)

はじめに

英語教師のために自主研修ハンドブック『がんばろう！ イングリッシュ・ティーチャーズ！』（田邊・他，2007；以下、『がんばろう！』と略）を上梓したのは2007年のことでした。

あれから10年近くが経過しましたが、この間、「免許更新」「小中連携」「Can-Do リスト」「英語で授業」、そして今度は、「グローバル人材育成」「アクティブ・ラーニング」など、次から次へと新たなチャレンジが示されてきました。それだけでなく「世界一忙しい教師」（OECD，2013）の「多忙感」は強まるばかりです。そして、皮肉にもそんな時代の流れは教師が本来、費やすべき自らの学びにも大きな影響を及ぼしています。

そんな折、編集部から自主研修に関する特集の総論をとの依頼がありました。実にタイムリーな企画なので、一も二もなくお引き受けすることにしました。しかしながら自主研修の特集の眼目は、こんな時代にあっても学びをあきらめない先生方の実践報告です。したがって前座としての総論では『がんばろう！』のなかから、特に心の起こし方、学びのサイクルの維持に関する記述を再録し、実践報告への水先案内とさせていただきます。

自主研修の基本的な考え

唐突ですが、みなさんは「教員研修」をどう英語にしますか。“Teacher Study”？ “Teacher Training”？ かつて「教員研修」は“Teacher Training”と称されていました。しかし近年は“Teacher Development” という名称が定着しているようです。実はこの変化にこそ自主研修の基本的な考え方

のエッセンスが凝縮されています。

Training という用語は，“a process by which someone is taught the skills that are needed for an art, profession, or job” (Merriam-Webster) と定義されるように、どちらかという技能 (skills) の習得に力点があります。一方、development は，“the act or process of growing or causing something to grow or become larger or more advanced” (同上) と説明され、grow (成長) を中心にしている概念だとわかります。

こうした教員研修の「開発的志向」の考え方は、教師の自主研修 (self-development) にも反映されるようになりました (浅田・他，1998；柳瀬・他，2014)。つまり、自主研修とは「(誰かから指示される) 技能面だけを伸ばすための行動」ではなく、「自分自身を成長させようとする内発的な思いに支えられた行動」なのです。

英語教育の目標

次に整理しておきたいのは、私たちが従事している英語教育そのものの目標です。英語教育が何を目指しているかに関して一定の共通理解がないと、教師が何のために development をはかるのかわからないからです。

しかしながら、日本での英語教育の目標は明治末期からの「実用 vs 教養」といった二項対立論から進展はなく、決定的な理論的な合意はありません。また、英語教育の目標は時代時代のニーズにも大きく左右されてきたという歴史的な経緯もあり、簡単に整理することは難しいのが現実です。

こうした事情を踏まえた上で、『がんばろう！』で

採用したのは、以下のような目標です(いわゆる「作業仮説」に近いものです)。

- ① 直接的目標：英語を通しての異文化間コミュニケーション能力を育てること。
- ② 究極的目標：より良き日本人・地球市民を育てること。

このように、『がんばろう!』ではあえて「異文化間コミュニケーション能力」育成というマクロ的な視点に立った目標を直接的目標と考え、さらに究極的目標には「より良き日本人・地球市民を育てること」という目標を設定しました。以下、同書(pp.8-9)から抜粋しておきます。

ことばという文化は、人間存在の根幹をなすもので、単にことばの表面的・形式的学習に流れることのないようにしなければなりません。異文化場面でのスムーズな英語コミュニケーションが実現するためには、「ことば・文化・人間」の総力を挙げての対応となることを十分認識することが必要です。英語学習において、「ことば・文化・人間」の有機な関係をつかむ活動が必須となります。英語による異文化コミュニケーションを大切にすることを通して、グローバルな視野・感覚・態度を身につけ、異文化間の人間相互理解に基づくグローバル・シティズンを育成することが究極的目標です。

以上のごとく、作業的な意味合いが強い目標ではありますが、このようにマクロ的な視点で私たちが従事する英語教育をとらえると、日本の英語教師が行う自主研修が目指すものが見えてきます。

それは単に語彙力、文法力、4技能などを向上させるだけではなく(もちろん大切なものです!)、文化(日英)、人間としての発想の違いや価値観といったような、より大きな項目に関する知識を拡大するものと私たちは考えました。つまるところ、やはり「英語教育は人間教育だ」なのです(三浦・他, 2002)。自主研修に training ではなく、development という用語が使用されだした理由がここにあります。

「英語運用能力」と「英語教授力」

自主研修が主眼とする「英語運用能力」と「英語教授力」に関する留意点を簡潔に述べておきます。

前者については、「二重構造」(「教師」であり、かつ外国語としての英語の「学習者」)と称される EFL (English as a Foreign Language) 環境にいるということを常に意識しておくべきです。

ことばは使い続けないと、突然、出てくるものではないことは自明の理です。“If you don't use it, you'll lose it.” は、けだし名言です。

ところが中学校では、教科書を中心としたルーティーンだけにとらわれることが多くなり、実際の意味での言語使用の機会が少なくなり、気づいたら「教科書にかかわる英語は使えるが、それ以外は…」ということが起きることがあります。

しかし見方を少し変えれば、英語の使用機会はたくさんあることに気づきます。授業での使用はもとより、独り言(TPOは考えましょう)、洋書や英字新聞などを読む。同僚との会話、メール、SNS通信を英語に切り替える。ALTとも積極的に英語で絡む。職員会議での発言や行事での来賓などのあいさつなどを頭の中で通訳するなどなど、使用する機会はふんだんにあります。

英語の習得には「ここまでやったから、はい、終わり!」はありません。言葉への高い意識を常に持ち、inputとoutputをくり返す。これを「常時英心」と呼んでいます。

「ことば・文化・人間」の総力をあげて、「常時英心」の心構えで、その運用能力を伸ばすことを目標とし、それを研修の射程に入れることがプロ教師の基本だと思います。

一方、後者の方では教師自身のコミュニケーション能力の熟達(含む英語)と評価技法の習熟を重視しましょう。一般に優れた授業ができる教師は卓越した授業の技術に支えられているといえますが、そうした先生方の技術の裏には並々ならぬ努力と鍛錬とが隠されています。

彼らは言語教育の理論や実践研究、意識向上につながる本冊子のような各種の資料や情報を収集するとともに、自己の課題に見合った目標を設定して、

自己の指導の在り方や授業設計を正しく振り返り、英語の授業改善の方向性やその方法を見出せるような研修を実践しています。そんな先生方は「反省的実践家」(reflective practitioner)なのです。反省的実践家はすべからず研究／公開授業の猛者です。人の目にさらされず、また評価も受けずにその域に到達した人を私は知りません。

一度、採用試験に合格したらあとは現場が鍛えるという昔からの言説には一理ありますが、ただ経験だけが教師の成長を促すというのは間違いです。英語教授力は教師が求め、客観的な評価のなかに身を置いてこそ身につくものなのです。

心を起こす

自主研修の基本とそれが向かうべきものを概観したあとにふれるべきポイントは自主研修の進め方です。

自主研修も生徒の学習同様、学習への動機づけと学び方(study skills)から成り立ちます。どう心を起こすのか、どういう姿勢で、具体的に何を、どのように取り組んでいけばよいのかという各論になります。

まず立ちふさがるのが、いかに自らを鼓舞するのことであり、研修の最初の関門となります。新任のときの燃えるような思いは、日々の激務のなかで次第に萎え、空回りが起きます。そんなとき重い腰、いや、心をどう起こすのか。その人のプロ教師としての真価が問われます。

以下は、ご存知のことかもしれませんが、『がんばろう!』(pp.11-13)からいくつか抜粋し、整理しておきます。要因は公的なものと私的なものとに大別できます。

1) 公的な要因

研修を受講した教師が回答したアンケートによると、「生徒指導で忙しい」「部活動で忙しい」「授業の準備で忙しい」、さらに「前よりも校務が忙しくなった」や「文書作成の量が多くなった」という理由があげられています。そのほか、「高校や大学受験の進学の縛り」「学年共通試験の問題」「生徒の学力の低さ」なども先生方がよくあげられる要因です。

とくに昨今話題の部活などを含む校務分掌に関しては、

- ①学校運営、②文書管理、③経理と施設設備の管理、④サービスの徹底、⑤教育活動の充実、⑥PTAや学校開放などへの対応

と、拡大の一途をたどっています。

加えて、教育相談として問題行動への対処やいじめ・不登校への対応、障害のある児童・生徒の教育ニーズに応えたり、外国籍児童・生徒や中国等の帰国生徒、海外帰国生徒、留学生の受け入れをしたりするなどの教育機会の対応なども増えてきています。

2) 私的な要因

私的な要因は個人により違い、また多岐にわたります。そのなかには公的な面との見極めは難しいものも存在します。そのためここでは自主研修に大きく関係していると思われるものだけをあげます。

とくに問題となっているのが、児童・生徒や保護者が抱く教師への期待と管理職や同僚教師からの期待とが、どの教師にとっても大きなストレスとなっているという現実です。

通常、児童・生徒や保護者が、教師に期待しているのは次のようなことです。

- ① 教師は、児童・生徒が質問することには何でも答えられる。
- ② 教師は、信頼ができる人間であるとともに、時間を厳守する。
- ③ 教師は、プロであり、誰に対しても公平で礼儀正しい。
- ④ 教師は、興味・関心や生活環境の異なる児童・生徒個々にすべて対応できる。
- ⑤ 教師は、異なる文化を持った児童・生徒に対しても適切に対応できる。

また、管理職や同僚が、教師個人に対して期待していることには次のようなものがあります。

- ① 互いに協力と努力、励まし合いを惜しまない。
- ② 他の教師に借りた教材や資料をきちんと返

す。

- ③ プリント印刷や教育活動の準備を任せきりにしないで公平に行う。
- ④ 教育についての経験や知見を分かち合う。
- ⑤ 成績処理などの管理が適切に行える。
- ⑥ 教室の整備・点検を怠らない。
- ⑦ 同僚の執務を、礼儀を欠くようなことをして乱すことはしない。
- ⑧ 児童・生徒や保護者について、文句を言わない。

このような多岐にわたる要因が複雑に絡まり、教師の「多忙」を引き起こし、ひいては先生方から研修の機会を奪うことにつながっているとと言えます。

喜びを増幅させる

ではどのように心を引き起こすのか。その方法は教師個人によって違いますし、違って当然です。

私自身の動機づけの奥底にあるのは「喜び」かもしれません。まったく知らなかった単語や表現を知ったときの喜び。本を通して指導法のコツを学び、それを授業で活用し、生徒が理解してくれたときに味わった喜び…などなど、その例に枚挙のいとまはありません。喜びのもとになるのは脳内報酬系のドーパミン (dopamine) という物質だと知ったのはずっとあとのことですが、英語を通して感じた喜びの連続の経験こそが、疲れたときに、そしてときに心折れたときに再び立ち上がる力をくれていると信じています。

ただこれは、あくまで個人的な体験です。それぞれの心を起こす trigger を、自分で求めることが肝要です。

PDCA サイクルの連続

心が立ち上がったのとはほぼ同時にとりかかるのが、PDCAの起動です。『がんばろう!』ではPDS (Plan-Do-See) というシンプルな用語でまとめましたが、最近はもともと生産管理の用語だったPDCA (Plan: 計画 → Do: 実行 → Check: 評価 → Act: 改善) が、より広く用いられているようです。PDCAを忙しい教職生活のなかで、どう実行

(Do) していくのか。ここに2つ目の関門があります。

自主研修のPDCAを進める力は study skills の中核である自律的学習 (self-regulated learning) といわれます。Plan (計画) を立て、目標に向けて意欲的に学ぼうとする学習意欲・態度を身につけ、その意欲を具現するための知識・技能を獲得する意識を on にする必要があります。

そうはいても、1日のTo-do-listにある項目が学内外のものを含めて2桁以上もある場合、個人が感じる疲労感半端ではないでしょう。ときにはそれが毎日のように続くこともあります。しかし、そんなときにでもやがてくる喜びをイメージして、自分を奮い立たせ実行し、それを評価し (Check)、うまくいかない部分には修正を施し、改善 (Act) を図るのです。

こうしたPDCAを支える「学びに立ち向かう力」を教師は身につけていかなばなりません。教師自身が自分の学びに立ち向かう姿勢は生徒に伝わります。そして、学びに立ち向かったあとに体感する新たな喜びが、また次なる学びに立ち向かわせるのです。そのサイクルの連続が英語教師の自主研修であり、プロ教師の醍醐味なのです。

おわりに

自主研修で出会うさまざま喜びを自分だけで独り占めにしたくない、それを生徒とともに分かち合いたいという、あふれる思い。そこにこそ教育の原点があるのではないのでしょうか。さて、ページをめくってみましょう。新たなあなた自身の喜びのために。

【参考文献】

- 浅田匡・藤岡完治・生田孝至 (1998). 『成長する教師—教師学への誘い』金子書房。
- 馬本勉 (2014). 『外国語活動から始まる英語教育—ことばへの気づきを中心として (現場と結ぶ教職シリーズ)』あいり出版。
- OECD 国際調査 (2013). 『国際教員指導環境調査』(TALIS).
- 田邊祐司・松畑照一・服部孝彦・坂本万里・Charles Browne (編) (2007). 『がんばろう! イングリッシュ・ティーチャーズ! [自主研修ハンドブック]』三省堂。
- 柳瀬陽介・組田幸一郎・奥住桂 (編) (2014). 『教師は楽しい—迷い始めたあなたのための教師の語り』ひつじ書房。
- 若林俊輔 (著) 小菅和也・小菅敦子・手島良・河村和也・若宥彦 (編) (2016). 『英語は「教わったように教えるな!』』研究社。
- 三浦孝・中嶋洋一・弘山貞夫 (著) (2002). 『だから英語は教育なんだ—心を育てる英語授業のアプローチ』研究社。

成長し続ける教師であるために

中島真紀子

(高崎市立吉井西中学校)

1. はじめに

一昨日までできなかったという事実が、今日もできないという理由になんかならない—

喜多川泰(『君と会えたから』ディスカヴァー・トゥエンティワン)

私の大好きな本の中に出てくる大好きな言葉です。私は英語教師として、生徒たちには英語を通して人間的に大きく成長してほしい、常にそう願っています。そして、その成長を促すためには、教師である私自身も成長し続けること、そして成長し続けるための努力をしていかなければいけない、と信じています。そのために心掛けていることは次の4つです。

- 出会いを大切にす
- 非日常をつくり出し、体験する
- 本を読む
- 積極的に、そして前向きにいく

2. 出会いを大切にす

最近では、さまざまな場所でさまざまな英語の研究会や講演会が開かれています。私自身、周囲の人に「趣味は研修と講演会を聴きに行くことです」と語るほどの研修・講演会好きです。その中でも、よく参加させていただいている英語指導力向上のための研修会は「英語授業研究会」や「ELEC 同友会」です。私の地元群馬県では、有志で「群馬英語授業研究会」を2ヶ月に一度開催し、自らの授業を撮影したビデオによる授業研究等を行っています。そこには、小学校の先生から高校、大学で教えていらっしゃる方まで、さまざまな職種や立場の人々が参加していただき、学びの多い場となっています。研修会を企画運営し、そしていろいろな会に参加させていただ

ているにもかかわらず、毎回、新しい「考え方」や「指導法」に出会うことができます。何よりも意識の高い英語の先生たち、同じ志を持った先生たちとの出会いや交流があります。その貴重な出会いは「明日からまた生徒のために頑張ろう!」「よりよい授業にしていこう!」「あの方法を使ってみよう」というプラスのエネルギーを与えてくれ、月曜日からの授業が待ち遠しくなるような感覚を味わわせてくれます。

また、私が得た素敵な出会いが、目の前にいる生徒たちの貴重な体験にまでつながった、という経験も幾度となくあります。以前、英語授業研究会で一緒にさせていただいたご縁で、NHK『基礎英語2』の講師であった文教大学の阿野幸一先生に、昨年度、本校の中学2年生の2クラスで飛び込みの授業をしていただくという幸運に恵まれました。阿野先生の、英語に対するあふれるような思いがぎっしりと詰まった、実に楽しい授業となりました。『基礎英語2』を家で毎日聴いていた男子生徒は、「いつもラジオから聴こえてくる声が目の前で聴こえる!」と、大興奮でした。

3. 非日常をつくり出し、体験する

車での20分間の通勤時間。そこでは「英語漬けになる」と決めています。意図的に非日常の世界をつくり出すことで、自分自身の英語力をブラッシュアップする時間にしていきます。出勤途上はNHKのラジオ講座を聴き、退勤途上には*English Journal* (アルク)を聴いています。ちなみに、ちょうど出勤時間帯に聴くことができるのは、『基礎英語2』または『基礎英語3』。担当している生徒たちに向かって「毎日基礎英語を聴こう!」と呼びかけているので、私自身も聴くことで、欠かさず聴いて

いる生徒とストーリー展開等についての会話が広がり、オススメです。また、実際に指導することになる言語材料について、使用頻度の高いものを紹介しているコーナーなどは、なるほど〜と感心することも多く、日々の指導にも確実に役立っています。

さらに、海外ドラマにはまっていて、お気に入りのドラマを、常に英語で視聴しています。ずっと長い間お気に入りのドラマは、ニューヨークを舞台とする犯罪ドラマ *Law & Order* です。思いがけないストーリー展開に引き込まれるだけではなく、おかげさまで、裁判で使われる専門用語にも非常に強くなりました。いったい、いつ使えるのだろうか、と思ってしまうですが…。まさに非日常です。

また、私自身が「英語の教科書を自分の言葉で語れるようになる」ことを目指しています。非日常の世界をつくり出し、架空の人物になりきり、教科書の本文をまるで自分の言葉であるかのように語れるようになるまで、ひたすら練習します。この作業は、必ず授業で役立ちます。教科書題材のオーラルイントロダクションを磨きたい、Teacher Talk を磨きたい、と思っている方には一番の近道だと思います。

4. 本を読む

英語がペラペラ話せれば英語教師が務まるのか？ その答えは、No です。私自身、さまざまな知識を持ち、物事を多面的に捉え、それらを生徒に伝えていける教師となれるよう心掛けています。まだまだ理想には程遠いですが…。もともと読書好きでしたが、最近は、よりたくさんの本、そしていろいろなジャンルの本を読むようにしています。今は学校図書室の司書さんのもとに通うことが、密かな楽しみとなっています。そこで人気のある本や新刊の情報を教えてもらい、生徒と競って借りています。生徒に人気の本を知って読んでおくだけで、small talk の話題が増えますし、生徒との日常会話も弾むようになります。

私の知り合いの先生は、教科書に出てくる登場人物や事柄についての知識を増やすために、題材の内容に関連した本を探し、教材研究の一環で読書を行っています。今回教科書が改訂され、*NEW CROWN Book 2* には *The Tale of Peter Rabbit*

が新たな題材として加わりました。恥ずかしながら、ピーターラビットの話自体を読んだことがなかった私は、早速購入して読んでみました。そのおかげで、オーラルイントロダクションもばっちり。そしてピクチャーカードと話とを見比べていた生徒が発した疑問にも、即座に答えることができました。読んでおいてよかった、と心から思った瞬間でした。

5. 積極的に、そして前向きにいく

〇〇年目研修などといったおさまりの研修は、正直面倒臭い…と敬遠してしまう方も多いと思います。それではもったいない。確かに日々の授業や校務に追われ、校外での研修は負担に感じることもあります。でも、せっかくの貴重な時間を使って行うものですから、できるだけ有効に活用したいものです。

私は、研修で代表授業等の機会があれば、積極的に立候補することにしてしています。多くの人に授業を見てもらうことで、自分の日々の授業を見つめ直すことができます。たくさんの方が学べます。同じ教科を教える英語科の先生からの指摘はもちろんですが、他教科の先生からの指摘や質問も、的を射えたり、新たな視点をもらえたりします。一人よがりの授業にならないようにするためにも、授業研究の機会を活用して、自己研鑽けんくわんにつなげています。

6. おわりに

教師となって4年目のこと、授業も学級運営も思い通りにいかないことが多く、全て周りのせいにしていた時期がありました。授業がうまくいかないのは生徒の意欲が低く、自主的に勉強しないから、と本気で思っていました。その時に先輩に言われた一言が今でも忘れられません。

「あなたの目の前にいる生徒がかわいそう。生徒のせいにしていても何も変わらないよ。」

「自分が源泉」という言葉があります。全ての結果は自分が生み出している、という考え方です。言い換えれば、全ての結果は自分の心がけや行動次第で変えていける、ということでしょう。自分自身の英語力・指導力を磨くことは、必ず目の前の生徒にいい影響を与えてくれますし、生徒の成長にもつながっていくと信じています。

特集 学び続ける英語教師であるために

英語教師としての「指導力」とは？ —これまでの実践から学んだことを通して—

山城 仁

(東京学芸大学附属世田谷中学校)

1. 学び続ける原点は部活動で学んだ指導観

私はこれまで十数年間、公立中学校の教師として多くの生徒と関わってきた。新任の頃は、授業の進め方や学級経営、生徒指導、そして部活動のことなどで多くの悩みを抱え、仕事に追われる日々を過ごしていた。上手くいくと考えられる方法を実践してはみるものの、その実際は生徒から「わからない」「できない」という反応ばかり。実践しては悔しさを感じるという毎日であった。

ある日、同じ部活動を担当していた先輩教師が「指導」した生徒は、着実に上達していることに気がついた。先輩教師は「生徒が偶然上手くできることと、生徒が意識的に上手くやり遂げることは全く異なる」ことを話してくれた。これこそが「指導」だと痛感した。つまり、先輩教師の「指導」では、競技力を向上させたり、競技に対する理解を深めさせると同時に、生徒が自ら意思決定し、自信をつけていけるよう意図的に仕向けられていた。その先輩教師の専門的知識の深さ、卓越した指導技術やそれらを生徒に伝え、体得させていく日々の積み重ねは、英語教師にも同じように必要だと考えた。それから私は英語教師としての「指導」のあり方を模索し始めた。

私自身の指導をふり返ると、その指導観は大きく3つの段階に分別できる。以下、その詳細について述べる。

2. 授業を真似すること

新任の頃に私がしていたこと(唯一できたこと)は、セミナーや文献で学んだことを真似、授業に取り入れることであった。優れた実践を真似することによって得られるものは多くある。指示の出し方や

活動の取りませせ方、活動展開などについて、多くを経験してきた教師のアイデアを取り入れることで、授業作りに対する考えは大きく変容する。自分にはない優れたアイデアを取り入れながら構成する授業は、展開に安心感があり、自身の未熟な指導技術を隠すことができる、と思っていた。しかし、英語教師としての信念を自らの外に依拠した「つぎはぎ実践」では、すぐに次なる課題にぶちあたった。「私は一体どのような生徒を育てたいのだろうか。」という疑問が湧き上がってきたのである。おそらく生徒の側からしても、「何をするのか見通せない授業」、「無理なことを要求される授業」という位置付けになっていたのだろう。「わからない」「できない」という生徒が続出した。それでも私は「つぎはぎ実践」を続けた。なぜなら、それしかできなかったからである。

3. 生徒とのコミュニケーションから学びを捉える

その後、私は小規模校に異動となり、少人数の生徒と日々の学校生活を送ることとなった。その学校で生徒と関わりが増えていくうちに、私の授業作りに対する指導観は大きく変容した。第一に考えたことは、生徒中心の授業を行うことである。まず、生徒が学んで楽しいと思える授業作りをすることに傾倒した。また、海外の学校の生徒と実際にやりとりし、自分たち自身や住んでいる地域の紹介ビデオを撮影して発信したり、手紙をやり取りして交流した。生徒は大変意欲的に授業に参加し、実際に英語を使用する授業を楽しんでいる様子であった。

それまで、自分のやりたいことを生徒に押し付ける授業をしていた私は、生徒とのコミュニケーションを通して多くのことに気づかされた。それは私が

実践したいことと、生徒が知りたいこと・やってみたいことは同じではないということだ。生徒が本当に知りたいこと・やってみたいことは、少し難しくても、生徒とコミュニケーションがしっかり図れば、チャレンジする心に火を灯すことができるということだ。それらを上手く紡ぐことで生徒の授業に対する好奇心は格段に向上する。授業中の反応や取り組み姿勢、提出物、また日頃の何気ない会話の中に授業作りのヒントが多くある。それらを見逃さず、授業に取り入れようとする姿勢は今でも大切にしている。

4. 実践を俯瞰して捉える

自分自身で考えて実践する授業を重ね、授業作りに対するアイディアが蓄積されてくると、教科書の扱い方を臨機応変に変更したり、授業プリントなどで生徒が楽しく学べそうな活動を選択しながら、授業展開を検討することができるようになる。その一方で、「自分のやっていることが本当に正しいのか」「楽しさだけに終始していないか」という次なる課題を感じるようになった。それ以来、私が取り組んでいるのは、「理論と実践の間に立つ」ことである。つまり、学術的知見と実践を結び、自分が取り組む実践の根拠を明らかにするということである。しかし、日本人中学生を対象とした研究報告はまだ十分に進んでいるとは言えず、調べた学術的知見は目の前の生徒に合わせて十分に検討し直す必要がある。理論と実践の往復は大変根気のいる作業であるが、高校・大学や海外の研究事例から学ぶことは非常に多い。論理的根拠 (rationale) を基に実践のあり方を考え、授業に生かすことは、中学校段階における指導のあり方を必ず進展させると考えている。

また、実践を俯瞰して捉える方法は、優れた実践や自分の実践を言語化することでもある。どのような手順で取り組んでいるか、なぜ(何の目的で)その実践をしているか、などということ自分の言葉で適切に語ることである。そうすれば、次にすべきことが明らかになってくる。さらに、それを周りの教師と共有することで、自分がない、新たな気づきが与えられることも多い。

授業実践には改善すべきポイントが必ず存在す

る。それに自ら目を向け、気づき、改善していくことが授業における指導力を向上させると考える。

5. 英語教師としての「指導力」とは

私はこれまで「指導力」を向上させようとしてきたというよりも、自分の授業を内省し (reflection)、改善しようとしてきた (reflective practice)。それが結果的に「指導力」の向上につながっていると考えている。「教師が成長していくためには、自分が持っている「どう教えるか」についての考えを、自分の教育現場の実際に応じて捉え直し、それを実践し、その結果を観察し内省して、より良い授業を目指すこと」(横溝, 2009)が必要である。生徒が発する「わからない」「できない」というサインに対して、生徒が理解できる手立てが必ずあるはずだと考えている。その手立てを創り出すことこそ、英語教師に求められている力ではないかと感じている。

英語教師にとっての「指導力」は多岐にわたるが、本稿から挙げられるのは以下の点である。

- | | |
|------------|---------|
| ・一貫した授業構成力 | ・指導技術力 |
| ・生徒との対話力 | ・ニーズ分析力 |
| ・論理的思考力 | ・思考具現化力 |

ここに挙げた要素は、それぞれが複合的に関わり合いを持つ。それを授業に反映させていながら、これからも生徒が学習を深めていく場面を多く創り出したいと考えている。私の座右の銘は、“Never Too Late”である。授業でも仕事でも、上手いことや失敗することがよくあるのだが、その度に改善方策を検討し、一つ一つ取り返していくことが一番の近道だと思っている。「もう手遅れだ」と決して思わず、生徒のためになる実践を検討し、実行し続けていくことで、結実する時が必ず来ると信じている。そのような思考は自分自身のあり方でもあり、自分自身を常に改善していこうとする姿勢は、英語教師の私にも必要なことだと考えている。

【参考文献】

横溝紳一郎 (2009). 「教師が共に成長する時—協働的課題探究型アクション・リサーチのすすめ」 吉田達弘・玉井健・横溝紳一郎・今井裕之・柳瀬陽介編 『リフレクティブな英語教育をめざして—教師の語りが拓く授業研究』pp.75-118. ひつじ書房.

特集 学び続ける英語教師であるために

英語教師としての私を支えるもの

—過去・現在・未来—

山元 洋

(千葉県立東葛飾中学・高等学校)

私の勤務する千葉県立東葛飾中学・高等学校は、2016年4月に併設型中学校を開校し、公立中高一貫校としての新たな歩みをスタートさせたばかりである。今回、初めてTEN編集部より「指導力・英語力の向上」というお題をいただき、改めて英語教師として日々、学び続けることの重要性を実感している。

私の授業

入門期は特にinput>outputが原則であるが、私は学習の初期段階からoutputの機会をより多く与えている。生徒は、英語のinputが少ないながらも、苦闘して自分の言いたいことを表現し、何とかして他者に理解してもらおう努力をし、言語能力以外の心理的な要因（「恥ずかしがる気持ちの克服」、「失敗しても大丈夫」、「みんな違ってみんないい」等）をクリアしなければならない。このような状況下では友だちとの助け合い、学び合いは必要不可欠なものとなり、生徒同士の「横」の協力関係が強固なものとなると考えられる。このoutputの機会をより多く与える試みはおおむね機能しており、自分の気持ちや考えを率直に表現できる教室の雰囲気を作り出している。特にプレゼンテーションにおいては、演じること、人に見せること、人に理解してもらおうことを意識して原稿を書き、読むスピードや間の取り方、立ち位置をも考えながら、練習するよう指導している。

私の指導の根っこにあるもの

誤解を恐れずに言うならば、英語は「実技系体育会」教科と私は考えている。すなわち、サッカーでいうシュートやドリブルと同じく、気が遠くなるほどの反復練習なくして英語の習得はない、という認識を持っている。英語の意味や構造を十分理解するこ

とは学習の大前提であるが、学習事項を定着させたり、それらを使って表現活動を行うには、意味を理解した英文を覚えるまで音読することが必要だと私は考える。どうしても頭に入らないときはひたすら書きながら音読し、徹底して反復練習するのである。

この考えは自分の学習方法に起因する。私は小学校5年生の頃からNHKラジオ『基礎英語』、そして今や伝説ともなっている大杉正明先生が講師の頃の『ラジオ英会話』をずっと聞いていた。ただ聞くだけではなく、本文をすべて暗唱・暗写することを中学3年まで続けた。しかし、すべての英文の構造等を完璧に理解していたとはとても言い難い。難解な英文は音と意味だけ把握して、覚えるまで無心で音読し、書いていた。

そのようにしてどうにか英語を教える立場に立った私が、指導力・英語力向上のために行ってきたこと、現在行っていること、これから行いたいことについて述べたいと思う。

高校の授業を持つこと・見ることで学ぶ

これまで勤務してきた私立公立の中高一貫校において、中学と高校の授業を同時に持つ機会が多かった。高校生の姿やレベルを肌で感じて、中学生を3、4年後に同レベルかそれ以上に引き上げるには、何をしなければならないか、という発想で授業を組み立てることが自然であった。結果、中高6年間を見通した指導の視点を持つこととなった。

もっと単純に考えれば、高校レベルの教材研究を行うことで、自らの英語力の維持・伸長に直結した。中学1年生に自己紹介プレゼンの指導をした次の時間は、高校生の副教材（大学入試レベル）の読解の授業を行う、というような具合である。初めは切

り替えが難しいが、慣れてくると新たな指導観が自分の中に生まれるので、中高一貫校に勤務し続ける限り、これからもずっと続けていきたいことである。

同僚から学ぶ

本校では、現在、もう一人の中学本務の英語科の先生と二人で中学1期生の授業を担当している。二人で同じことを実践しており、授業前には授業案を共有し、入念な打ち合わせも行う。授業実施後も互いにフィードバックを行っている。

月並みではあるが、指導力の向上にはこれがいちばん手取り早く即効性がある。これまで勤務した学校を含め、特に英語で指示を出す際、どんなタイミングでどんな英語を使っているか、同僚の先生方を注意深く観察させていただき、いいと思ったらすぐに使ってみようとしている。自分が今まで使っていたものよりも生徒が素早く理解し動くこともあれば、逆にうまく指示が伝わらないこともあり、試行錯誤ではあるが、指示のバリエーションは増え続けている。最近取り入れた例としては、ペア活動のときの Exchange your role. / Change role. ⇒ Change part, また Are you ready? ⇒ All set?, そして Look at me. ⇒ Eyes on me. などである。

また、ちょっとした声かけとそのタイミング、話題の出し方や関連付け方、どんな場面でどのような「技」を使ってパワーポイントを提示しているかなど、他教科の先生方から学ぶこともとても多い。幸い、本校には「互見週間」という取り組みがある。年に2回それぞれ1週間ずつ、先生方がお互いの授業を教科の垣根を越えて参観し合い、最終日に全体会を開いて授業について協議するものだ。転勤が宿命の公立校において、2期生以降も同様な指導を行い、教員が替わっても継続できる「東葛中スタイル」の英語指導の確立を目指し、このような場を活用し同僚から学び、研鑽を積んでゆきたい。

部活動指導から学ぶ

部活動に関わったことから、サッカーの指導概念や方法が集団を動かすうえで大いに参考になっている。クラスをチームとして考え、集団として生徒を

動かすトレーニングを積ませることで、生徒同士の関わり合いを通して深い学びや期待以上の成果を導くことが可能である。例えば、単純なパス練習Aと動きに制約のあるパス練習B、制約を加えたシュート練習Cを順番に反復練習し、その後A,B,Cをすべて組み合わせた練習を行い、最後にすべての制約を解いてゲームを行うと、子どもたちは練習した動きをベースにしているものの、指導する側が想定していないアイデアからゴールを奪うことが何度も起きるのである。これは、音読やペアワーク、パターンプラクティスといった英語の基礎を作り上げる反復練習を積み重ねた結果が、プレゼンなどでの成功に繋がっていくのと同じである。

また、私の教員としての指導理念の大きな幹となったのが、サッカー元日本代表監督のイヴィツァ・オシムのことだと、その根っこにある彼の指導の考え方である。オシムは「厳しくも温かく」選手を鍛える指導者であり、彼の「育てながら勝つ」理念は、教員である私の立場に置き換えると、「育てて結果を出す」とほぼ同義となる。

休みがなく、不満を溜めている選手たちに向かって『君たちはプロだ。休むのは引退してからで十分だ。』、負けた試合後の記者会見で『どうして勝てなかったのか。練習で追求させる必要がある。選手たちにはもっと練習してもらおう。』など、オシムは示唆に富む独特の表現で選手を鼓舞している。このことばを英語学習の文脈で読み替えると、前者は『君たちは学生だ。学ぶのをやめるのは卒業してからで十分だ。』、後者は『どうしてプレゼンがうまく行かなかったのか。授業、家庭学習で追求させる必要がある。子どもたちにはもっと反復練習してもらおう。』と考える。

他にも、英語既習者向けの雑誌を読んだりすることもあるが、何といっても、悪戦苦闘しながらも何とか英語で自己表現しようとする生徒たちから、一番たくさん示唆をもらっている。そういう意味では、ここまで書いてきたような努力を生かして「授業をすること」が、最大の指導力・英語力向上に繋がると信じ、私は今日も教室へ向かう。

【参考文献】
木村元彦(2008).『オシムの言葉』集英社文庫.

「流れる」ような授業を

重松 靖 Shigematsu Yasushi

(東京都国分寺市立第二中学校)

1 はじめに

英語科の教師は、脚本家であり演出家、大道具・小道具係であり演技者だと思っている。私は、授業を1つのショーとして考え、どうすれば生徒を引きつけ、飽きさせることなく、伝えたいことを伝えられるかを考えるのが好きだった。今回は NEW CROWN の GET を使った「ショー」を流れるように演出するにはどうしたらよいか、紹介したい。

2 PPP, Input - Intake - Output

授業構成を考える上で、PPP, Input-Intake-Output というプロセスは大切にしたい。

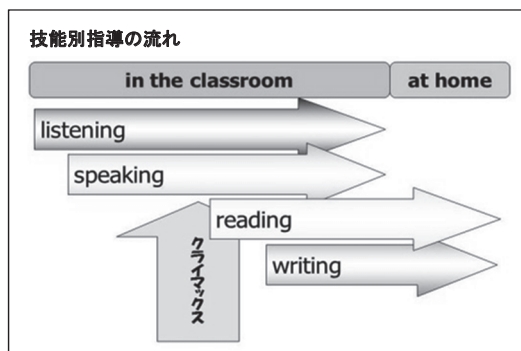
PPP の3つのPは、Presentation (提示), Practice (練習), Production (表現, 活用)であり、指導手順を示す。これは、目標文を板書し説明する(提示)、目標文をリピートさせたり練習問題を解かせたりする(練習)、最後に和文英訳で英文を書かせる(表現)という流れで行う文法訳読式の授業にも当てはまる。しかし、これでは言語を使いこなす力が身につくはずがない。コミュニケーションを意識したPPPでなければならない。

そこで押さえないのが Input - Intake - Output というプロセスである。英語を表出(output)するには、大量の英語を聞いたり読んだり(input)して、文構造を内在化(intake)しなければならない、というものである。inputする英語は理解できるレベルよりほんの少し難しいもので、実際に英語を使うことによってintakeされると言われている。なお、intakeされる量はinputする量の2~3割程度だそう。つまり、outputするには大量のinputが必要ということになる。

3 音声から文字へ

では、具体的な授業構成を考えてみよう。まずその授業のクライマックス、山場となる言語活動を考える。目標となる言語材料を使い、生徒がいきいきと、目を輝かせて行う言語活動である。私は、授業では学校でしかできないことを重点的に行うべきだと思っている。「読むこと」や「書くこと」は自宅でもある程度できるが、「聞くこと」や「話すこと」は難しい。そこで、授業で「話すこと」「聞くこと」を中心に行うとなると、当然山場の言語活動も「話すこと」「聞くこと」が多くなる。

そのクライマックスに向かって、スモールステップで少しずつ少しずつ自信をつけさせ、盛り上げていく。大切なことは音声で攻めること。文字を読ませるのは必要最少限にとどめ、文法の説明などはしない。長々とした解説や板書をノートに写させることは、生徒を一気に「学習モード」にしてしまう。「流れる」ような授業にするためには、音声主体の「活動モード」を維持しなければならない。



具体的な流れは以下のようなになる。

・ウォームアップ

英語は体育や音楽と同じ実技教科である。体育の

準備運動、音楽の発声練習同様、英語の授業でもウォームアップは不可欠である。英語の歌、チャット、ビンゴ等が考えられるが、生徒の状況に応じて工夫したい。あくまで言語活動のウォームアップであり、「学習モード」にしないことが大切である。

・導入

落語でいう「まくら」、漫才でいう「つかみ」と同じく、授業の中で「導入」は最も大切な部分の1つである。自然な場面・状況を設定し、目標となる文・表現を数多く聞かせ、生徒に意味を予測させる。場合によっては、キーになる表現をフラッシュカードに書き、提示してもよいが、細かな説明はしない。生徒とのQ&Aを繰り返しながら意味を確認し、自然な流れの中でドリルに移行する。「さあ、では練習しましょう。Let's practice!」とは言わずにドリルに進みたい。

・ドリル

ドリルには mechanical drill, meaningful drill, communicative drill の3段階がある。mechanical drill はあまり意味を理解しなくてもできる機械的なドリルである。単純な繰り返しや、文中の単語を入れ替える substitution drill などの文型練習である。communicative language teaching が導入され文型練習の弊害が指摘されたが、それは mechanical drill だけで終わってしまうことが問題なのであり、口慣らしをさせるためには重要なドリルである。

mechanical drill に続けてよく行われるのが meaningful drill である。意味の理解を伴い、目標となる英文を聞いたり、話したりする必然性がある。例えば、information gap を埋める活動などがあげられる。

meaningful drill は、meaningful とはいえ、基本文を繰り返し聞いたり、話したりするドリルであるため、使用する言語が制限され、非日常的な場面設定となってしまうことが多い。そこで、ドリルの最終段階として実際のコミュニケーションの場面を想定した communicative drill が行われる。しかし、場面設定が難しく、また時間的にも余裕がないことが多かったため、私は Lesson の出口の活動として行うことが多かった。

・本文の内容理解

ここでようやく文字が中心となる。しかし、ここでも「音声から文字」を意識して進めたい。

まず、閉本したままピクチャーカードなどを使って oral introduction を行う。教師が一方的に話すだけでなく、生徒との Q&A を織り交ぜながら本文の概要を把握する。

次に、教科書を開き、CD や教師の範読を聞きながら文字で確認する。細かい内容についての問いを出しながら数回黙読させる。新出語彙の意味を予測させる活動もぜひ取り入れるとよい。最後に目標文や、重要な表現・文法事項などにアンダーラインを引かせる。そうすれば、生徒が自宅で復習したり試験勉強をするときに、大切な部分を確認するのに役立つ。私は、アンダーラインを引いた文や表現は必ず試験に出題する、と公約していた。

・新出語彙の確認

音読する準備として新出語彙の確認をする。内容理解の段階で意味の予測と確認は済ませてあるので、ここでは発音の指導と余裕があれば綴りの練習を行う。フラッシュカードを使い全体一人を織り交ぜながらテンポよく行う。

・音読

内容が十分理解できてから音読に入る。英文の意味内容を考え、大切な部分のピッチを上げたり、気持ちを込めて読んだりできるようにする。大切な文は全体で何度も繰り返させ、さらに個人でも読ませるなど、メリハリをつける。chorus reading, buzz reading, individual reading, pair reading, shadowing などを取り入れ、テンポよく進める。

・まとめ

文法の整理をしながら、学習した表現を使って自己表現をさせる。「教科書本文を3回写す」、「5回音読する」は、誰にでもできるお決まりの宿題である。

4 おわりに

NEW CROWN の GET を使った授業の流れを紹介した。2時間程度要するが、常に「山場を考え、そこに向かって盛り上げていく」工夫をしたい。何より、教えていて楽しい！と思える授業をしてほしいと思う。教師が楽しければ、生徒も楽しい！



テスト作りの研修

根岸雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. High-stakes な日本の定期試験

言語テストは、high-stakes なものと low-stakes なものに分けられる。Green (2013) は、これらに関して “A high-stakes assessment has important consequences for the assessee (such as access to job opportunities); a low-stakes test does not.” としている。

一般に、入試や検定試験のような大規模テストは high-stakes test とされ、定期試験のような classroom assessment は low-stakes test とされるのかもしれない。しかし、Green (2013) が “The same assessment may be high stakes for some assesseees, low stakes for others.” と述べていることからわかるように、classroom assessment だからといって全てが low-stakes とはならない。

日本における定期試験の結果は、評定を決定する重要な資料となり、その評定は入試につながる内申書に反映される。この意味では、日本における定期試験は、れっきとした high-stakes test ということができる。日本の定期試験の問題は、生徒にとっての重大な結果をもたらす high-stakes test でありながら、作成者である教師が十分な専門的トレーニングを受けていないために、さまざまな問題を抱えていることが往々にしてあるという点だ。

2. 定期試験作りにおける慣習

だからこそテスト作りの研修が必要なわけだが、仮に評価やテストについての研修に参加したとしても、必ずしも評価やテストに関する見直しや改善という具体的な行動に結びつくわけではない。という

のも、教師の多くは、自分のテスト作りのパターンが確立しているからだ。研修を受けてそこでなされる提言にある程度納得しても、自分のテスト作りの慣習があまりにも確立していて、どう変えてよいかわからない。あるいは、研修から戻り、しばらくたつと、もとの慣習に戻ってしまうことはよくある。

こうした慣習の多くは、教師自身が中高生の時に経験したテストに由来すると考えられる。「定期試験とはこういうものだ」というイメージが、そこで形成されるのだ。さらに、教員になり、同僚の先輩教員から指導されることもあるだろう。しかし、こうした先輩教員も同じような形でテスト作りの慣習を身につけているため、引き継がれる定期試験の慣習がテスト作りとしての問題を抱えていた場合、その問題は世代を超えて引き継がれることになる。

もう一つの問題としては、いいテストを「見る目」がないということもあるかもしれない。実は、世の中にはモデルとなるようなテストがないわけではない。しかし、「見る目」がなければ、目の前にたとえいいテストがあっても、素通りしてしまう。

3. 研修の第一手：定期試験を見せる勇気

こうした問題を克服するためにも、テスト作りの研修が必要ということになるのだが、教員研修では授業についての研修が多数を占め、テストについての研修は極めて限定的である。

研修というと、恩師の故若林俊輔先生の言葉を思い出す。先生は英語科教育法の授業で、「体育の教師はすごい。毎日授業を公開しているのだから。」とおっしゃっていた。ただ、まだ学部生だった私には、先生のおっしゃる意味がピンと来ていなかった。しかし、今思えば、教室の中で授業をしている（英語

科のような教科の) 教師には、すべての授業を他人の目にさらすというのは勇気の要ることだ、ということとはよくわかる。しかし、他人の目に触れるからこそ学ぶこともある。

では、テストはどうだろうか。実は、テストは公開されている。生徒や保護者、さらには塾関係者にも実質的には「公開」されている。ただそれは、彼らの「目に触れている」だけで、そのテストの是非を検討するために公開されているわけではない。授業をよくするために公開授業をするのであれば、テストをよくするためにもテストを公開して、それをもとに議論するべきであろう。

4. 研修の次の一手：テストを見る目を養う

研修では、テストを公開した上で、議論を行うことになるが、そのためにはテストを「見る目」を養う必要がある。テストには、実にさまざまな要素があり、視点を統一せずに議論を始めてしまうと、收拾がつかなくなってしまう。

テストの研修でまず必要なのは、言語テスト理論についての基本的な知識だろう。ここでは、少なくとも、言語テストの妥当性・信頼性・実用性・波及効果といった概念とそれらのテスト作りへの具体的な関連性について、共通理解を図る必要がある。

ただ、その際、言語テストの文献を参照するかもしれないが、その多くは、大規模テストや熟達度テスト (proficiency test) を前提としているために、そこで書かれていることがすべてそのまま到達度テスト (achievement test) としての定期試験に当てはまるわけではないので注意が必要だ。入試や能力判定のための熟達度テストでは、能力の弁別を正しく行うために、なるべく難易度も内容も幅広くカバーするように出題されている。それに対して、定期試験は、比較的短期間の特定の指導と学習の成果を見るために、テスト内容は極めて限定されることになる。文法問題で言えば、バラバラの文法項目を多岐にわたって出題するのではなく、特定の文法項目に絞って集中的に出題することになる。

5. 研修の最後の一手：定期試験のモデルの提示

英語の教師がテスト作りの悪しき慣習から抜け出

せなかったのは、定期試験の「モデル」が提供・共有されてこなかったことも原因だろう。確かに、定期試験の「モデル」といっても、指導目標や授業のやり方によってさまざまな「モデル」があり得る。しかし、ある程度汎用性のある形は提供できるはずだ。

私が研修で関わったいくつかの地域では、教育センターや地域の中心となる学校が主導して、モデルとなる定期試験を作成し、その地域の先生方に配布している事例がある。もちろん、これらは右から左に使えるわけではないが、電子ファイルで配布しているので、そのファイルに上書きしていくと、モデルに沿った自分の定期試験を作成することができる。こうしたモデルが、技能や言語材料ごとに整理されたきれいな問題構成であれば、教師のテスト作りの慣習で、ごった煮の総合問題を作ってしまうようになっていたとしても、そうした問題が出題される余地はなくなるだろう。

6. 最後に：定期試験作りの難しさ

定期試験は特定の指導に関連付いたテストである。そのために、テストング・ポイントを指導目標に関連づけようとするが、その際、言語テストならではの難しさがある。その指導内容が言語的な独立性の高い文法や語彙などの項目ならいいが、さまざまな言語知識を統合して使わなければならない技能のテストとなると、指導目標に関連付けるのは言うほど簡単ではない。

たとえば、「物語を読んで、そのあらすじをとる」ことが指導目標になっていても、「読む」という言語活動が統合的であるために、指導目標だけに焦点化したテストを作ることは容易ではない。ある読みの技能をねらって作成したリーディング・テストで生徒が不正解であった場合でも、読む技能の問題ではなく、言語知識の不足から不正解になってしまう可能性もあるのだ。

日本における定期試験作り、まだまだ解決しなければならない課題がある。

【参考文献】

Green, A. (2013). Exploring language assessment and testing: Language in action. Routledge.

Projectを活用した授業実践(1) —生徒がアクティブに・統合的に 英語を使用する授業をめざして

谷口友隆 Taniguchi Tomotaka (相模原市立由野台中学校)

① はじめに

今回の NEW CROWN には、旧来の Mini-project に変わり、新しく Project というコーナーが新設されました。およそ3~4ヶ月に1回の割合で、学んだ表現や言語材料を総括し、統合的な活動が行えるように工夫されています。統合的な活動を行うメリットを私はこう考えています。

- ・生徒が自分の習熟に応じた取り組みができる。
- ・英語を実際に使うことにより、コミュニケーションの楽しさ、また達成感や伸長を実感として感じ取ることができ、学習への動機を引き出しやすい。
- ・生徒が主体的に学ぶ雰囲気を作りやすい。
- ・それぞれの創意工夫や個性・特性を活かした取り組みができ、生徒理解にも役立つ。
- ・実際に英語を使うことにより、間違いを訂正されたり、理解の不確かな部分に気づいたりすることを通して、それぞれの課題・習熟に応じて英語力の伸長を図ることができる。
- ・必然性を持って協働学習のスタイルを取り入れることができ、学びあいや生徒同士の交流を図ることができる。

語学は教師が教えれば上達するのではなく、生徒が豊富に練習しなければなりません。そのために、学習の一つのまとまりとして、生徒が主体的に取り組むことができる統合的な活動を仕組み、その達成を意識しながら日々の授業を組み立てています。この取り組みが先生方にとって、何かの参考になればと思い、これから数回にわたり、各学年の具体的な活動例とそのねらいや留意点についてお伝えしていきたいと思います。よろしくお願いたします。

② 1年生の Project 実践例

今回は、NEW CROWN Book 1 から、Project 2の「友だちにインタビューをしよう—インタビューをして友だちの紹介文を書こう」の実践例をご紹介します。

この Project では友だちの紹介文を書くことが最終的なアウトプットと設定されています。これは、この習熟の段階で、友だちの紹介文として表現できる情報は、お互いに周知の事実が多くなってしまい、クラスの発表には向かないと判断されたからだと思いますし、実際その通りです。しかしながら、クラス内での発表を通して、相互理解を深められるように、また、コミュニケーションを中心に据えて、今後の英語の授業を組み立てていくためにも、1年生のうちから、少しでも発表の機会を作りたいと考え、私は教科書の Project をベースにさらに少し工夫を加えて、“My Hero”と題して、「自分の尊敬する人物を発表する」というゴールを設定しました。

ターゲットとなる文法事項は「be 動詞と一般動詞の3人称単数現在形の文を使い分けること」。同時に「発表を通して、お互いのことについて理解を深め、また英語の発表に慣れること」をねらいました。さらに、2年生の1学期に配置されている Book 2の Project 1「有名人を紹介しよう」につながるようにということも考えました。

教科書の Project を行う前段階で、中学生に人気のある芸能人やスポーツ選手、また学校の先生をグループで1人決めて、その紹介文をつくり、1つのグループが出題者となって、誰のことを紹介しているかを他のグループが当てるというクイズをクラス全体で行いました。クラスメートの前で発表する時のハードルを低くするために、グループによる協働学習を取り入れて、クイズ形式で行いました。以

下に学習の段階を分けて手順の詳細をお示しいたします。

(1) Three Hint Quiz

教師がある有名人について、単語3語で表現し、それをヒントとして、生徒が誰のことかを当てるクイズを行います。生徒の語彙力を確認しながら、生徒が今後必要としそうな語彙をinputするねらいがあります。

例) America / a baseball player / curry and rice

(答) イチロー選手

comedian / fish / teeth

(答) 明石家さんまさん

(2) Three Hint Quiz (生徒版)

教師の例を参考にして、次は、生徒が3ヒントクイズを作成し、クラスで出題してもらいます。この活動では、生徒が自発的に、辞書を使って単語を調べたがるので、辞書指導に繋げることもできます。

(3) Guess Who Quiz

次は、教師が英文でヒントを作成して出題します。芸能人や教科書・人気アニメのキャラクターなどでもよいですし、学校の先生などにしても大変盛り上がりします。ここでは、3人称単数主語の一般動詞の文やbe動詞の文や他者紹介に役立つ語彙・表現をたくさん聞かせることに注力します。

例)

She is from Nagoya.

She has a sister.

She is good at skating.

(答) 浅田真央選手

He sleeps in the closet.

He is a robot.

He helps Nobita.

(答) ドラえもん

(4) Guess Who Quiz (生徒版)

生徒がグループで有名人を一人選び、その答えに対してグループで(3)のようなヒントの文をできる限

りたくさん作成させます。この時に過去に教師が(3)のクイズで出した文を印刷して渡しておくと、生徒はスムーズに活動に取り組みます。ある程度の数の英文ができれば、その中からヒントとしてふさわしい文を各グループで3つ選んで、それぞれクイズを作成してもらいます。

この問題作成の段階では、実際に英文を作成する過程で、改めてbe動詞と一般動詞の文の違いや、3人称単数現在の-s、また、[主語-動詞-目的語-前置詞句]というような英文の構造について、生徒がそれぞれ意識することをねらっています。教師もグループの活動をそれぞれ見て回り、間違いがある場合は個別に指導することができます。また、同じ間違いが散見される場合は、改めてクラス全体での文法指導や確認を行うよい機会となります。

(5) Guess Who Quiz 大会

グループ対抗で、Guess Who Quizを行います。各グループがそれぞれ(4)の段階で、自分たちが作ったクイズを出題し、他のグループが解答者になってクイズを楽しみます。

(6) My Hero (教師のモデル)

教師やALTが“My Hero”と題して、自分の尊敬している人物についての発表を行います。発表を聞いた生徒が、それを完成のモデルとして、自分の作品のイメージを考えさせることがねらいです。また、過去の生徒の作品のなかでよいものを見せて、さまざまなパターンの英文に触れさせてあげます。

(7) My Hero 自己表現活動

教師のスピーチ原稿やGuess Who Quiz作成時の語彙や英文作成のノウハウを活かして、自分の尊敬する人(有名人・芸能人・スポーツ選手・家族・先生など)についてのスピーチ原稿を作成する。

(8) 発表会

教師によって確認済みのスピーチ原稿を、暗唱できるまでくり返し音読練習を行い、クラス内で発表します。

3. 実施にあたっての工夫と留意点

このような少し大きい活動を実施するとなると、多くの先生方の懸念は、授業時間の確保にあると思います。しかし、実施に当たって、1~(3)は帯活動として毎時間5分間など、少しの時間を取り、ある程度の期間続けて実施するようにします。(4)~(6)はそれぞれ1/2単位時間でできますので、(4)~(5)、(5)~(6)などと1時間の授業で行うことも可能です。(7)も1/2時間程度の時間を2~3回家庭学習も交えて実施すれば、40人の教室でも、それほど多くの時間を必要とする活動にはなりません。

それどころか、このような創意工夫を凝らして自分を表現する活動では、生徒がそれぞれに楽しさと必然性を持って考え、主体的に英語を「聞き」、「話し」、「読み」、「書き」はじめます。そして、これら4技能を生徒が統合的に学習することを通して、英語に触れ、慣れ、そして身につけていく様子をうかがうことができます。

英語教育界では現在Can-Doやアクティブラーニングという言葉をよく耳にします。くり返しになりますが、語学は教師が教えれば上達するのではな

く、生徒が豊富に練習しなければなりません。ですから、教師が教え込む時間を極力短くし、その代わりに、教科書を活かしながら、生徒が主体的に考えたり、学んだり、取り組んだりできる授業を考えていくことは、Can-Doや、アクティブラーニングの考え方に通じると思います。

4. おわりに

今回は発表を面白くするために、クイズ形式で、自分の尊敬する人物をテーマに行いましたが、教科書の活動をそのままゴールの活動として行ってもよいと思います。その際、構成的グループエンカウンター の書籍で『中学校編・エンカウンターで学級が変わる Part 1』(国分康孝)のなかに、「PR大作戦」という他者理解の活動があります。こちらは日本語での活動ですが、友だちへのインタビューを通して、周りの友だちに紹介しあう他者理解をねらったエクササイズの方法が示されています。構成的グループエンカウンターの手法も大いに参考になります。生徒の実態に即した適切なねらいを持って活動を組み立てていくことが大切だと感じています。

生徒の作品例

☆My Hero☆



My hero is Ms. Nittono.
She is a kindergarten teacher.
She lives in Kanagawa.
She is very kind.
She likes children very much.
I like children, too.
Do you like children?



She plays the piano.

Can you play the piano?

She draws pictures very well.

I like her.



【参考文献】

金谷恵(編)(2009).『英語授業ハンドブック 中学校編』株式会社大修館書店.
 国分康孝(監修)(1996).『エンカウンターで学級が変わる Part1 中学校編』株式会社図書文化社.

Just Now

今、私立小学校の外国語教育に何が起きているのか(2) —「英語ができるようになりたい！」という子どもたちの思いにどう応えるか

入江 潤 Irie Jun
みょうじょう
(明星学園小学校)

1. はじめに

「ねえねえ、先生、どうやったら英語ができるようになるの？ 英語ができるようになりたい！」

ここ最近の揺れる私学の小学校の外国語教育、さらには日本の英語教育を考えると、子どもたちのそんな叫び声が聞こえてならない。果たして、小学校で「何を」「どのように」経験させていけば、子どもたちの願いを叶えてあげられるのだろうか。本校の英語教育を例に、小学校英語の在り方に迫りたい。

2. 何を？

(1) 教育課程における英語科の役割

教科教育課程の中で英語科が担う教育には、①「全教科で共通して育てたいもの」と、②「英語科だからこそ育てなければならないもの」がある。本校英語科の場合、それらは、①「人・もの・事の見方やそれらとの関わり方」、②「英語の運用力」となる。

(2) 英語教育における小学校英語の役割

次に考えるべきは、英語教育全体の中で、小学校だからこそ特に育てておきたいものが「何か」である。本校では、子どもたちの「できるようになりたい」気持ちに応えるために、次の3つを挙げている。

①情報を処理する力

英語の世界でもリラックスでき、伝えられた内容を推測したり、伝えたいことを表現したりする力を持たせたい。

②「英語らしさ」の感覚と視点

自分がどんな英語の使い手を目指しているかイメージでき、イントネーションや発音、語順や代名詞の視点などにおいて、相手により伝わりやすい英語を使おうとする力を育てたい。

③自律的に学ぶ力

自分で生きていけるようになるためにも、次のような学び手に育てていきたい。

- ・自分が何を学んでいるかが分かっている
- ・自分の学習目的を理解している
- ・自分自身を評価するポイントを持ち、自分の力を客観的に判断することができる
- ・自分に合った学び方を選び、実行できる
- ・互いに協力して学ぶことができる

3. どのように？

(1) カリキュラム

カリキュラムは次の2つのポイントで考えている。

①子どもたちが表現したいことは何か

英語は「ことば」、そして「ことば」は「表現のための道具」。表現欲があつてこそ、ことばとしての英語も獲得される。本校のカリキュラムは、「自分のこと、友だち、家族、好きなスポーツ選手、ミュージシャン、週末の予定、歴史、物語について英語でやりとりできるようになりたい」という子どもたちの気持ちからカリキュラムを組み立てている。

②どのような順序で経験させるか

「好きなスポーツ選手について英語で言いたい」と言ってもすぐにできるようになるわけではない。よって、カリキュラムでは、そのことが表現できるようになるためにどの段階でどのようなことを経験させていけばいいかを考え、汎用性の高さや表現のしやすさなども考慮して英語表現を系統的に組んでいる。例えば、1、2年生の段階では子どもたちの興味のあるトピック（色、数、食べ物、動物など）を通して英語でのやり取りを進め、英

語の情報処理の経験を積み、語彙も増やす。しっかりと学びたい3年生では、少し長めの英語の歌やラ임을扱ったり、2年生までの経験の上に英語を文で表現することを経験させたりする。認知面での成長が更に高まる4年生からは、それまでの音声での経験を文字でも確認しながら、代名詞や肯定・否定・疑問文、形容詞や動詞の変化を整理し、表現の自由度を高めていく。よって、話題も自分のことから友達や好きなスポーツ選手、更には世界や歴史のことなどに広がっていくようにデザインされている。

(2) 授業時数

本校では、全学年で週2時間の英語の授業を行っている。授業をするからには、学校行事があっても最低週1回の授業は子どもたちのために保障されるべきだと考えてのことである。

(3) 授業形態

3年生までは全ての授業でTT（日本人教師と英語の native speaker）を行い、4年生以上では、週2回のうち、1回はTT、もう1回は日本人のみでの授業を行っている。

(4) 授業

授業にとって重要なねらいの設定や活動の選択と進め方については、次の2つを意識している。

①社会に出た時に使える力をつけさせているか

いくら楽しい活動であっても英語が使えるようになることに繋がっていないければ意味がない。「聞く・話す・読む・書く必然性があるか」「コミュニケーションになっているか」を、自問自答しながら進めている。

②間違った英語を教えていないか

子どもたちは「先生が使う英語は正しい」と疑うことなく取り込む。I like dog. How many? のような非文を提示しないように心掛けている。

(5) 教材

3年生までは、絵を見ながらやりとりが深まる教材（『English in Wonderland』『WORD BOOK』ぼーぐなん、『えいごリアン』NHK等）を使用し、4

年生以上では、音声での体験が文字でも確認できる、文字の豊富なテキスト（『English in Action1-4』ぼーぐなん）と、リスニングやライティングを通して子どもたち自身が自己評価できるワークブック（『WORD BOOK』ぼーぐなん）を使用している。

(6) 評価

「評価」は大きく次の4つの視点で捉えている。

①授業中の教師による評価

授業中は評価の繰り返しである。評価は、必要に応じて、recastやadviceという形で子どもたちにフィードバックされる。必要があれば時には、児童に授業後に声をかけたりもする。

②授業中の子ども自身の自己評価

ワークブックでリスニングやライティングに取り組むことなどは、子どもたちにとって、自分の理解度を測る有効な機会になっている。

※日本語でコメントを書かせることはしない。

③学期末のテスト

毎学期末に、それまで触れてきたものについてのリスニングテストなどを行っている。テストは直後に自己採点し、自分に足りない学びについても考えさせるようにしている。

④学期末の評価表

毎学期末に評価表を出す。一人ひとりにコメントも書くが、「年間目標」と「子どもたちの現状」「今学期に経験した活動」「来学期の内容」をまとめたものとなるため、どちらかといえば保護者の子ども理解・英語教育理解を目的としている。

4. おわりに

「日本人はなぜ英語ができるようになってこなかったのか」これは、小学校英語を考える際に私自身が常に問い所としている問いである。改めて確認するが、子どもたちは英語ができるようになりたいと思っている。そして、私たち大人にはその思いに応えなければならない。教育現場は、政治や経済に巻き込まれず、目の前の子どもたちの姿から教育が目指すべき在り方を学び続けたいものである。

Shame

日本は「恥の文化」で、英語文化圏をはじめとする西洋は「罪の文化」としたのは R. ベネディクトの『菊と刀』である。この説は、いわば、人が悪いことをした場合、日本社会では、他人の眼を気にして「恥」として受けとめ、西欧社会では、神や法律など絶対的な戒律や規定に外れていると考えて「罪」を感じる、とでもなる。これは大筋では当を得たものと考えてよい。しかし、「恥の文化」の日本人も罪の意識はあるし、「罪の文化」の西欧人にも恥の意識はある。本欄では、特に、後者の例をみてみたい。つまり、今回は、日英の単語の文化的意味として、〈shame vs 恥〉をとりあげ、できれば、R. ベネディクトの定説に対する若干の補足としたい。

まず、個人的な経験から始めて恐縮だが、筆者が西欧人も「恥」を意識するのだと実感したのは、ニュージーランドのウェリントンに半年間、滞在していたときである。1985年から1986年にかけてだから、今から30年ほど前のことである。当時、筆者はウェリントンのヴィクトリア大学の客員研究員だったが、マオリ語の復権運動に興味を持っていたので、署名運動に参加したり、マラエ(マオリに人たちの集会場)に出入りしたりしていた。そんな折り、マオリ語の復権を求めて国会包囲デモがあり、これに参加した。その際にこのデモを止めに入った政府の役人や警察官にデモ隊の人たちが発したことばの中に Shame on you! と Shame, Shame, Shame! があった。日本語にすると「恥を知れ」などになるだろう。この shame の使い方を学んだのは「恥ずかしながら」筆者が43歳のこのときであった。

その後、オーストラリアでシドニー大学の学生集会でもこの大合唱を聞いた。米国のアトランタの学会に出たときも何かのデモ行進に出遭って、このシュプレヒコールを聞いた。イギリスではロンドンの市庁舎に向かった労働組合のデモでもこれを叫んでいた。そして、極めて最近の例では、これは直接聞いたわけではないが、読者諸氏もご存じのイギリスの EU 離脱が決まったあと、離脱派のリーダー

だった B. ジョンソン氏が首相候補を降りると言った翌朝に、彼の家の前で何人かの人が Shame on you! と叫んでいたという。

shame は日常の会話にも使われる。たとえば、For shame! (何たるごまだ)、It's a shame of me to ~ / that ~. (~して残念だ)、His act shamed his family. (家の名を汚した) などである(和訳は一例)。前述の Shame (on you)! もデモなどに使われる「恥を知れ」の意味の他に、「だめではないか」「困るわ」「みっともないです」「悲しいよ」などの「軽い」意味でも使われる。これは、一種の言語の「化石化」(fossilization) と言えなくもない。ことばとして痕跡は残っているが、現在はその意味が薄れているのである。

一方、「恥の文化」である日本には当然ながら、「恥」という語を使った表現が日常茶飯事にある。「恥ずかしい」「恥をかく」「恥を知れ」「恥じ入る」「恥を忍ぶ」「恥の上塗り」などである。そして、筆者の推測では、日本人のほとんどにとって、この「恥」は化石化したことばではなく、本来の意味がまだ残っている。ところが、デモや抗議集会などのときには、「恥を知れ」のような表現は多くは使われない。

なぜ日本社会では英語圏の Shame on you. のような「恥」の使い方が少ないのだろうか。「恥の文化」なのだから、他人への公的な攻撃や批判という肝心要の時に「恥を知れ」のような単刀直入の言い方があっていいはずなのだが、あまり聞かれない。

この理由には2つ考えられる。1つは、日本人は、かつてのように恥に重きを置かなくなったからである。電車内で化粧をする、人前で大声で話す、人を欺くなど一般人の行為から始まって、行政や政策に関する為政者の言い訳や放言に至るまで、「恥」に対する精神が薄れてきた。もう1つは、「恥を知れ」のような文言があまりにきついので「それを言ったらおしまいよ」という気持ちがあるからではないだろうか。後者だったら救われる。日本社会における「恥」の精神は、逆の意味で生きているからである。

Offering Challenges: A Motivating Teaching Strategy

Concha Moreno García

(Tokyo University of Foreign Studies)

I'm sure that it would be hard to find a teacher who has not heard of the self-fulfilling prophecy or the Pygmalion effect. According to this prophecy, in the words of Rosenthal and Jacobson, changes in teachers' expectations bring about changes in students' achievement.¹

I'm equally certain that every one of us has gone through something similar to this; in our classes we have pupils who are not doing very well, who progressively get behind the rest of the group. We might remember our reaction. On occasions we might indeed have thrown in the towel, thinking that everything in our power has been tried and, therefore, it's now up to the students to make the appropriate effort to improve. On other occasions, however, one might believe that the students were capable of overcoming the difficulty. Accordingly, encouragements like "Keep trying, you can do it!" or "Excellent, well done!" was offered. When, toward the end of the course, students find their effort rewarded with success, as teachers we can feel rewarded ourselves. In this light, why don't we apply the positive Pygmalion effect to the way we conduct our classes? Should we not convey to students that they are capable of doing more than they think they can do? The question is, what is the best way to do this? My answer would be to offer challenges providing the students with a sense of achievement. When a person overcomes a difficulty, he or she becomes aware of their abilities. That, in turn, becomes a source of motivation, as against risking boredom by familiar routine.

Language classes, Spanish, in my case, should be something alive and aimed not only to acquire knowledge easily forgotten after the exams, but also to complete development of

the pupils. My persistent goal is not that each pupil says "today I have learned..." at the end of the class, but says "today I have been able to..." And I include here grammar classes as well.²

In order to achieve all this, one possibility could be to use the exercises or activities found in textbooks in a more creative way. For example, we can ask the students working in pairs to appropriately amplify given dialogs or sentences provided for structure practice.

You: Where is Alice?

Your partner: I think she's in her bedroom.

You: _____

Another option would be for the students to look for connections among different short exercises and then create a new text reworking what appears in the book and adding discursive markers.

Why not say that each student chooses his favorite word and then the class creates a text that includes all of them? In this way, we use not only the vocabulary but also the discursive and textual coherence connectors. And, of course, the imagination to create a logical text. I do it orally and in the end they are proud of their effort.

There are many possibilities for those who wish to vary the routine practices, for those who apply Plutarch's observation: *The mind is not a vessel that needs filling, but wood that needs igniting.*

¹ Rosenthal, Robert and Jacobson, Leonore. *Pygmalion in the classroom*. New York: Holt, Rinehart and Winston. Inc. 1968.

² To this respect consult my recent lecture at *Instituto Cervantes Tokio*.

<http://conchamorenogarcia.es/2016/06/09/gramatica-e-interaccion-una-relacion-compatible/>

What are clouds?

A cloud is a large **collection** of very small **drops** of **water** or ice crystals. The drops are so small and light that they can **float** in the air.

How are clouds formed?

All air holds water, but near the ground the water is usually in the **form** of an **invisible** gas. The name of the gas is water vapor. When warm air rises, it **expands** and cools. Cool air can't hold as much water vapor as warm air, so some of the vapor **condenses** and gets on very small pieces of **dust** in the air. The vapor makes a very small drop around each dust **particle**. When **billions** of these drops come together they become a **visible** cloud.

教室が英語使用の場となるようなアクティビティを考える際、英語のみならず他教科における学習内容に注目してみるのはいかがでしょうか。

教科内容と言語学習を統合して指導することを内容言語統合型学習 CLIL (Content and Language Integrated Learning) といい、特にヨーロッパの外国語教育を中心に、2000 年以降盛んに実践されています。CLIL の掲げる原理は、「使いながら学び、学びながら使う (Learn as you use, use as you learn.)」であり、その方法論として、内容 (Content)、言語 (Communication)、思考 (Cognition)、協学 (Community) を有機的に結びつけ、この枠組みに則して教材を作りと指導を行うことで、言語学習と内容理解の相乗効果 (synergy) により高品質の教育が実現されるとされています (Coyle & Marsh, 2010)。

中学校における CLIL 指導は、年少数回でも定期的に、授業の一部で、日本語も交えつつ行うとよいでしょう (渡部・池田・和泉, 2011)。特に初期段階では、インプット活動に適していると考えられます。一部の生徒だけが体験したことや興味のあることに偏ることのないよう、教科学習や学校行事で生徒が何を学び、何を体験しているのかに注目してみましょう。母語による学習の背景知識を活かし、興味をもって未知語の推測などに発展できる教材作りが理想的です。クラス単位で参加する授業や活動を応用すると、授業中の生徒同士の協働も期待でき、定期的に継続しやすくなります。

たとえば、ある中学校 2 年生のシラバスでは 6 月に理科の第 2 分野で「雲のでき方と水蒸気」を学習します。日常生活でも「雲」は馴染みのあるものなので、扱いやすいトピックです。英文はなるべくオリジナルのものを採用することをお勧めします。また、加工を最小限にとどめるため、中学生用には、

英語圏の小学校 (中～高学年) の教科書レベルのものから英文を採用するとよいでしょう。洋書の児童向けのテキストなどを参考にしてもよいし、最近では以下のような CLIL を主眼においたアクティビティのマニュアルも出版されています。

- ・“Starter: CLIL Activity book for beginners” (Westermann)
- ・“CLIL Activities: A resource for subject and language teachers” (Cambridge)

ウェブサイトでも、子ども用の科学などを扱ったものがあるので活用できます。さらに YouTube などの動画も多くあるので、ヴィジュアルと合わせて音源入手もでき、活用しやすいでしょう。「雲のでき方」を扱った上記の英文は、インターネットのサイト: [weather WizKiz \(http://www.weatherwizkids.com/weatheclouds.htm\)](http://www.weatherwizkids.com/weatheclouds.htm) から

採用したもので既習内容を考慮して加工してあります。未習語は状況に合わせて日本語による補足が必要ですが、リーディング活動の際は日本語のルビを記したまま生徒に配布して構わないでしょう。“ice crystals” や “water vapor” といった語彙や、“so ~ that ...” の示す意味を推測させることをねらいとしています。

リスニング活動の際は、音源は「肉声」という教具を使用してはいかがでしょうか。まごつく機器操作で生徒の学習意欲を削ぐよりも、コミュニケーション活動を念頭に表情や様子を見ながら、内容が直聴直解で伝わるように、繰返しや抑揚、スピード調節に配慮し、ジェスチャーやヴィジュアルの使用、時には母語で補足しながら授業を進めるとよいのではないのでしょうか。英語を聞かせるための教師の発音練習にもなります。また、グループワークなどを取り入れ、内容理解の確認ができる設問等を用意すると「思考」が期待できる活動になります。

ウェブサイトのご紹介

三省堂英語教科書ウェブサイトでは、授業に役立つさまざまなサポート資料などをご用意しております。ぜひダウンロードしてご活用ください。

● NEW CROWN ホームページ

<http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/index.html>



《授業計画に役立つ》

- ・年間指導計画
- ・CAN-DO リスト
- ・評価規準一覧
- ・移行措置資料

《指導を助ける》

- ・使い方ガイドブック
- ・よくある質問



● 学校の先生向け・会員制サイト「教科書サポート三省堂プラス」 **NEW**

教科書を使った指導などをサポートするための会員制サイトです。全国の小学校、中学校、高等学校（高等専門学校を含む）、特別支援学校の先生方にお使いいただけます。ご登録・ご利用は無料です。

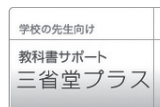


収録予定（中学校英語）：

- ・Lesson 別 確認テスト
 - ・英語のしくみ確認ワークシート
 - ・評価例（28年度版『NEW CROWN』対応）
 - ・題材資料集
- and more...

教科書トップページよりアクセス

→ <http://tb.sanseido.co.jp/>



TEACHING
ENGLISH
NOW

34号

2016年
9月5日発行

編集・発行人：北口克彦
発行所：株式会社三省堂
〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14
電話 (03) 3230-9411 (編集)・9412 (営業)
[NEW CROWN ホームページ]
<http://tb.sanseido.co.jp/newcrown>
印刷：三省堂印刷株式会社
〒192-0032 東京都八王子市石川町 2951-9
電話 (042) 645-6111 (代)

編集後記

三省堂教科書の会員制サイトがよいよオープンしました。学校の先生専用のページを作ることで、サポート資料等をご提供しやすくなりました。今後、授業でご活用いただける素材やサポート資料を掲載していきますので、ぜひご登録ください。(ほ)

クラウン チャンクで英単語 Basic

投野由紀夫 編 B6判 288ページ 2色刷 定価(本体750円+税) ◆赤シート付き

チャンク学習で発信力UP!!

チャンクで覚えれば、そのまま英作文や英会話に使えます。一つひとつの単語をより確実に覚えられますので、リーディング力ももちろんアップ。

中学基礎語450語+750チャンクを収録

高校基礎レベルまでの重要語を厳選して収録しています。

- ◎ 付属品 (採用のみ)
 - ▶ 問題作成ソフト
 - ▶ ドリルシート(PDF)
 - ▶ 確認テスト(Word)
 - ▶ 本文データ(Excel)
- ◎ 関連商品
 - ▶ 音声CD(2枚組・別売)
 - ▶ ドリルノート(別売)



中学英語 まるまる総復習 BOOK

B5判 136ページ
定価(本体1,000円+税)

中学英語のエッセンスを凝縮し、無駄なく効率的に総まとめができます。「単語編」「文法編」「長文編」の3パートから構成され、高校英語の土台となる基礎を、4技能でしっかり復習することができます。また、学習の仕方・復習の仕方が詳しく説明されているので、着実な定着が図れます。

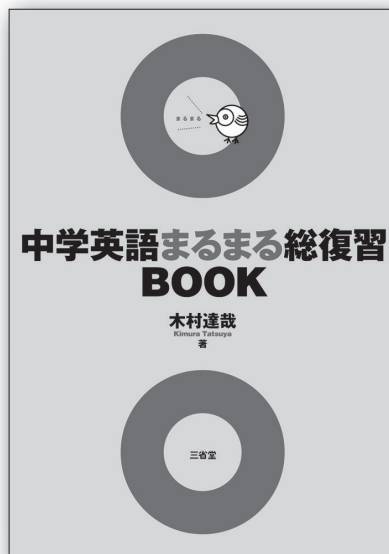
- 単語編 中学英語のうち重要単語300語を厳選しました。1ユニット60語から成り、全5ユニットで重要単語の定着を図ります。
- 文法編 中学英語の文法事項を項目ごとに復習します。各文法事項を4技能(読む・聞く・書く・話す)でバランスよく学習できます。
- 長文編 全4ユニットから成る仕上げの長文読解のパートで、学習後に同じ英文を再度読む「TRY AGAIN」でしっかりと復習ができます。
- ◎ 付属品
 - ▶ チェックシート(単語編・文法編)
 - ▶ 確認テスト(長文編)
 - ▶ 本文データ

まるまる



木村達哉 著

音声
CD付



アクティブラーニング
型のご授業に最適!

新しくなった初級クラウン!!

6社18冊すべての中学英語
教科書コーパス徹底分析!

NEW 教科書エッセンスページ 新設!

英語力の基盤となる最重要動詞の徹底学習に役立ちます

NEW 中学教科書 頻出語約1,270に **中** **中**, CEFR-Jの **A1** **A2** ロゴマーク新設!

語彙学習と入試学習の信頼できる目安になります

NEW 進化するウェブサービス新設!

音声情報や学習情報をスマホでチェックできます(2017年開始予定)

初級クラウン英和辞典 第13版

田島伸悟・三省堂編修所 [編] B6変型判 832ページ 〈2色刷〉 巻頭カラー〈4色刷〉 1,836円(本体価格1,700円+税)

- ★中学最重要動詞17の必修要素をまとめた **教科書エッセンスページ** 新設 **NEW**
- ★28年度版中学英語教科書の最頻出語に **中**(約620), 頻出語に **中**(約650) 新設 **NEW**
- ★CEFR-J語彙表に対応する **A1**(約1,070), **A2**(約1,190) 新設 **NEW**
- ★安心の総収録項目数 1万5,300 (イディオム・変化形など含む) ★圧倒的な総収録用例数 1万7,500

初級クラウン和英辞典 第11版

田島伸悟・三省堂編修所 [編] B6変型判 640ページ 〈2色刷〉 巻頭カラー〈4色刷〉 1,836円(本体価格1,700円+税)

- ★6社18冊すべての中学英語教科書をコーパス化し徹底分析 ★英語表現に役立つ「基本形」と学習コラムが満載
- ★安心の総収録項目数 2万1,200 (中見出しなど含む) ★圧倒的な総収録用例数 1万9,200

初級クラウン英和・和英辞典 第11版

田島伸悟・三省堂編修所 [編] B6変型判 1,472ページ 〈2色刷〉 巻頭カラー〈4色刷〉
3,240円(本体価格3,000円+税) シロクマ版 3,240円(本体価格3,000円+税)

- ★英和13版と和英11版を1冊にまとめた便利でお得な合本

かわいい!!
シロクマ版
初登場!

大きな文字
で読みやす
くなった!!



※内容は「初級クラウン英和・和英辞典」と同じです。
※実際のデザインや色は多少異なります。

三省堂

<http://www.sanseido.co.jp/>

〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14 TEL 03 (3230) 9411 (編集)・9412 (営業)

□大阪支社
□名古屋支社
□九州支社
□札幌営業所

〒530-0002 大阪市北区曾根崎新地 2-5-3
〒460-0008 名古屋市中区栄 3-25-43 瑞穂ビル 4F
〒810-0012 福岡市中央区白金 1-3-1
〒060-0042 札幌市中央区大通西 15-2-1 ラスコム 15ビル 3F

TEL 06 (6341) 2177
TEL 052 (252) 9211・9212
TEL 092 (531) 1531・1532
TEL 011 (616) 8722